

# アメリカの発展：独立から南北戦争まで

本 城 精 二

## 序

今日のアメリカ合衆国は政治力、経済力、軍事力、その他ほとんどの領域において世界第一の国である。いわゆる超大国である。ほとんどの学問、研究の分野においても今日のアメリカ合衆国は世界の最先端を行っている、と言ってよいだろう。しかしアメリカ合衆国の歴史は浅く、独立以後200年余りである。新世界と呼ばれていたアメリカ大陸へヨーロッパ人が移民を始めてからでも約400年の歴史しかない。歴史は浅く、文化的にもまだ未成熟なアメリカは、独立した後もヨーロッパからは見下げられた国であった。粗野で弱小国家と見られていたそのアメリカがどのように発展・発達したのかは興味深い問題である。独立から南北戦争に至るまでアメリカはどのように発展していったのか歴史的過程をかいつまんでみたい。

発展・発達というとき、上に記した政治力、経済力、軍事力以外にも、あらゆる分野のものを考慮する必要がある。例えば科学や工業技術の発達、あらゆる産業や商業の発達、鉄道等の輸送機関の発達、国民の生活水準の高揚、あらゆる学問分野の水準、その他すべてのものを考慮に入れて論述すべきである。しかしこの小論においてはアメリカの領土の拡大と人口の増大に焦点を当てて、独立から南北戦争までの間にいかに発展したかについて論述したい。

### 1. 独立と領土の拡大

まず最初に独立の頃の動きを *American Eras* から数項目拾い挙げてみよう。

1776 4, July Congress adopts the Declaration of Independence.

1778 6, Feb. France and the United States sign a treaty of mutual defense

1783 3, Sept. British and American negotiators sign the Treaty of Paris, recognizing American independence and ending hostilities.<sup>1</sup>

このように1776年に大陸会議で独立宣言の採択を議決しているのである。フランスと手を組んだことも効を奏し、イギリスとの戦いも終わり、そして1783年にパリ条約で、イギリスは正式にアメリカの独立を承認しているのである。このような経過を経てアメリカは独立国となったのである。ただイギリスとアメリカで独立と認める時期の差違はあるが、アメリカは独立を宣言したときから独立国と見なしている。

さらに独立直後の主な項目を挙げてみよう。

1784 14, Jan. Congress ratifies the Treaty of Paris.

1785 11, Jan. Congress moves from Philadelphia to New York City.

1788 21, June New Hampshire is the ninth state to ratify the Constitution. With this ratification the Constitution is declared to be in effect.

1789 4, Feb. Electors unanimously choose George Washington as the first president of the United States. John Adams, who ran a distant second, becomes vice president.

1790 29, May Rhode Island becomes the last state of the original thirteen to ratify the Constitution.<sup>2</sup>

独立後各植民地は州となり、それぞれの憲法を制定した。しかし州政府と連邦政府の関係をどのように位置づけるかが難問であった。ジョージ・ワシントン、ジョン・アダムズ、トマス・ジェファークソン（Thomas Jefferson）などの建国の父祖（Founding Fathers）達が活躍した結果、国家の礎ができたのである。独立したアメリカ合衆国は連邦の憲法を制定し、連邦政府のあり方、連邦政府と州政府との関係等々、国家としての基礎を条文化して確立した。そして連邦憲法の効力を発するには13州のうち3分の2以上の州、つまり9以上の州の批准が必要であった。上に示す通り9番目に批准したのがニュー・ハンプシャーで、その時点から連邦の憲法は効力を発した。そして1789年にジョージ・ワシントンが初代大統領となった。そのときの副大統領はジョン・アダムズで、ア

ダムズは2代目の大統領である。

最初の首都はフィラデルフィアであったが、上に示す通り1785年にニューヨークに首都が移され、後年ワシントン D.C. が首都になり現在に至っている。そのように13の州から始まったアメリカ合衆国がどのように領土すなわち州を増加させていったのか、考察してみよう。

アメリカ合衆国は大西洋岸の13州から始まったが、その後内陸部に次々新たな州が誕生した。政治的には独立宣言をした1776年にアメリカ合衆国が誕生したが、それ以後領土は段階的に拡大していった。当初の13州より西の大地は既存の13州のどの州にも属さず、合衆国政府のものであった。それは新しい州を生み出すための大地であった。事実、時代が進むにつれて13州の西に新しい州が次々誕生した。やがてアパラチア山脈を越えてミシシッピ河までヨーロッパ系の移民、つまり俗に言う白人による開拓が進み、その次にはミシシッピ河を越えて、その西方に次々と新しい州が誕生していくこととなった。

独立後の領土に関する歴史的な項目に目を向けてみよう。1783年の段階では、アメリカ本土の形はまだ現在のものとは違い、ミシシッピ河以東であった。また北はどこまでなのか、さらに南はどこまでなのか曖昧なものであった。その当時はまだイギリスの植民地であったカナダとの国境も、またスペインの植民地であったメキシコとの国境も未確定であった。

1783年の時点ではアメリカ合衆国の領土はミシシッピ河本流以東であったが、合衆国政府は1803年にフランスよりミシシッピ河以西の「ルイジアナ」と呼ばれる広大な土地を購入した (Louisiana Purchase)<sup>3</sup>。その結果アメリカの領土はほぼ2倍になった。しかし当時その領土がどれほどの大きさなのか、どのような地勢の大地なのかははっきりとは判っていなかった。そこで合衆国政府は探検隊を出して新しい大地を調べさせることにした。それがルイス＝クラーク (Lewis and Clark) 探検隊である。1804年5月にセントルイスを出発した探検隊は各地を調査しながら、太平洋岸まで到達し1806年9月にセントルイスに戻るまで詳細な調査をした。現在のアメリカの北西部を探索し、どのような大地なのか、動植物の生態、分水嶺、山や川といった地形その他詳細に調査し、その記録はアメリカ合衆国政府に報告され、その後その情報が国民に知られることになった。そして後にミシシッピ河以西の新しい領土に人々が西部開拓への道を辿ることになる。

領土が拡大するにつれて開拓者たちがアパラチア山脈を越え、それに伴って次々と西に向かって新しい州が誕生した。独立以後内陸部が西に向かって開拓され、最初の13州に加えて、ケンタッキー（1792）、テネシー（1796）、オハイオ（1803）、インディアナ（1816）、ミシSSIP（1817）、イリノイ（1818）、アラバマ（1819）が州になり、ミシガンはテリトリー（准州）となった。さらにミシSSIP河口の西に位置するルイジアナ州は以外にも早く1812年に州になって連邦に加入しているのである。ルイジアナ州はミシSSIP河の東に位置するアラバマ、ミシSSIP、そしてフロリダ（1845）より早く連邦に加入しているのである。またミズーリもミシSSIP河より西に位置する州としては比較的早く1821年に連邦加入しているのである。[上に示した（ ）内の数字は連邦に加入した年であり、開拓者たちが入植していたのはそれより以前であることが推測される。]

領土が拡大するということはヨーロッパ系の移民である白人の開拓が拡大することを意味している。そしてそれは原住民を追放し原住民の土地を奪うという結果をもたらしている。モンロー大統領は1825年、原住民であるインディアン（現在の呼称はネイティヴ・アメリカン）をミシSSIP河以西に強制移住する政策を発表した。そして1830年強制移住法を成立させ、インディアンを辺境の不毛の土地へと追いやり、そのために各地で戦闘が起こった。西部開拓にはインディアンとの戦闘が伴っていた。戦闘を好まない平和的な部族もいたが、非常に好戦的な部族もいた。好戦的な部族は政府軍や武器を持った白人移住者たちと激戦となった。武器で優っていた政府軍である騎兵隊は好戦的な部族を殲滅していった。そして原住民の大地を奪いながら、生き残った原住民をさらに西方の不毛の地に追いやり、白人移住者たちの土地は西へ拡大していくこととなった。

この頃「明白なる運命」（Manifest Destiny）という名目のもとで領土を拡張しようという気運が高まっていた。「明白な運命」とは1812年以後の数十年の間アメリカ国民に広く信じられていた信念であった。神から与えられた大地を拡大し、自分たちの領土を明白にしようとする国民的な信念であった。その信念に基づいてアメリカの領土は着実に拡大していった。

アメリカの北東部と当時のイギリス領で後に独立国となったカナダとの国境

も未確定であった。しかしその後1842年8月9日イギリスとウェブスター＝アシュバートン条約（Webster-Ashburton Treaty）にてメイン、ヴァーモント、ニューヨークなどの北境が確定した。これにより五大湖から東の部分に関しては英領のカナダとアメリカ合衆国との国境は確定した。

五大湖から西のカナダとの国境は次のように決定した。1844年12月4日大統領選挙があった。そのときの民主党の大統領候補ポーク（James K. Polk）は“All of Oregon, All of Texas!”を党のスローガンに掲げて選挙運動を進めた。「拡大」こそ「明白なる運命」（Manifest Destiny）として選挙運動を進めた結果、ジェイムズ・ポークが大統領に当選した。「北緯54度40分、さもなくば戦争だ」（“54° 40' or Fight!”）のスローガンを掲げて選挙戦を進めて勝利した。北緯54度40分は現在のアラスカの南端あたりである。

1844年の大統領候補者のポークは現在のアラスカ近くまで国土拡大を狙っていた。しかしイギリス政府は拒否し、コロンビア河を国境とする案を提示した。結局1846年にオレゴン協定の成立により、北緯49度線で国境は決着した。

メキシコは1522年からスペインの植民地で“New Spain”と呼ばれていた。しかしナポレオンが1808年にスペイン本土に侵攻したあと、植民地であるニュー・スペインに独立の気運が起こり、その結果1821年に独立しメキシコ共和国となった。その後メキシコとの国境は次のように決まっていた<sup>4</sup>。まず1836年2月23日 アラモ（Alamo）攻防戦（～3月6日）があり、その間にテキサスはメキシコからの独立を宣言した（3月2日）。そして1836年メキシコとの戦争を経て、テキサスは独立国家となった。この時点では、テキサスはまだアメリカの一部ではなく、あくまでもテキサス共和国という独立国であった。そしてもっと多くのアメリカ人、すなわちアメリカに住んでいる人々がまだ人口の少ないテキサス共和国に移入してくることを望み、次のように無償の土地を与えるという政策で移住してくることを奨励した。家族持ちの者には1280エーカー、独身の者には640エーカーの無料の土地を与えた。土地は有り余るほどあるために、与える土地に何不自由はなく、人々は土地を所有することは長年の夢であり、移住政策は成功した。テキサスの人口は1835年には3万人だったのが10年後には14万2千人と増大した。

その後独立国となったテキサス共和国は次に示すようにアメリカ合衆国と併合し、アメリカ合衆国の一部となった。

1845年、「明白なる運命」をスローガンに掲げて当選したポーク大統領が就任する3日前に、退任するタイラー（John Tyler）大統領がテキサス併合に署名したのである。そしてテキサス共和国は新しい州として連邦に加入した（12月29日）。その結果テキサスが合衆国の一部となった以上、メキシコと対峙するのは合衆国政府である。

テキサスがアメリカの領土となったとき、ポーク大統領にとってはその西の領土についても懸念事項であった。すでにアメリカ人と呼ばれる多数の者がカリフォルニアに定住していたために、いつかはメキシコと紛糾することが予測できた。それを危惧したポーク大統領は“New Mexico”とよばれていた土地（現在のニューメキシコ州とアリゾナ州）とカリフォルニアの土地のために4000万ドルを提供すると申し出た。そして特使をメキシコに派遣したが、特使も提供予定の金も拒否されてしまった。

ちょうどそのとき（1846年）、リオ・グランデ河とテキサス南西部を流れるニュエセス（Nueces）川との間の三角地帯の領有権が未確定であった。当然アメリカもメキシコも自国が有利なように主張した。アメリカはリオ・グランデ河が国境であると主張し、メキシコはニュエセス川が国境であると主張した。このために両国の間で紛争が始まった。

1846年4月26日アメリカ合衆国とメキシコ両軍の戦闘が開始し（5月13日、対メキシコ宣戦布告）、やがて1847年9月14日メキシコ・シティは陥落した。メキシコ・シティを制圧した後、アメリカ政府とメキシコ政府が国境を協議することとなった。

リオ・グランデ河がアメリカとメキシコの国境になった。ニュー・メキシコと呼ばれていた領土とカリフォルニアはアメリカのものとなった。その時に手に入れた土地のためにアメリカはメキシコに1500万ドルを支払った。アメリカの立場から言えば、それは支払ったのではなく、「良心のお金」（conscience money）であった。このようにして1848年アメリカは大西洋から太平洋までの広大な領土を支配するようになった。北は北緯49度から、南はリオ・グランデ河までを支配する広大な国土を持つ国家へと発展したのである。独立から72年後に「明白なる運命は」実現したといえるのである。

その後1853年12月30日ガズデン購入（Gadsden Purchase）し、アリゾナ、ニュー・メキシコ南部をメキシコから購入した。これによりメキシコとアメリ

カ国境はほぼ決定した。このようにして大西洋から太平洋まで、リオ・グランデ河から北緯49までを領土とし、「明白なる運命」は実現したことになる。このようにしてアメリカの本土の形はほぼ今日のものと同じようなものとなった。

## 2. 移民の増大と西部開拓

アメリカが独立宣言をした後、1790年に第1回目の国勢調査が行われた。それによると、人口は3,929,214人であった。それ以後アメリカの人口は着実に増加していった。それは自然増加ではなく、主として移民によるものである。

移民にはそれぞれの祖国に理由があった。飢饉による食料事情やその他さまざまな要因によりアメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド等へ移民せざるを得ない事情があった。たとえばアイルランドの場合1845年に大飢饉が起こり、非常に多数の国民が餓死をした。さらに非常に多数の人々が他国への移住を余儀なくされた。そしてアメリカへも多数の移民が流入した。その翌年の1846年には、アメリカへのアイルランド移民流入が頂点に達した。またドイツの場合はジャガイモ飢饉が発生し、食料を求めて国外に移住せざるを得なかった。また1848年のドイツ3月革命もドイツ移民がアメリカに流入を増大させた要因であった。またスカンジナビアでは材木業が盛んであったが、鉄の出現により材木関連の仕事が減退したため、国外へ職を求めて移住する結果になった。

移民の増大によりアメリカの人口は飛躍的に増大し独立後、一時的に移民が停滞したこともあったが、人口はどんどん増え続けた。そして1860年の国勢調査によれば、人口は31,443,321人である。1790年の国勢調査の時点から10倍近い増加である。

このような人口の増加はアメリカ側にある引き付ける要素（pull factor）が働いていると言えるだろう<sup>5</sup>。アメリカが移民を引き付ける要素とは何であろうか。

アメリカはヨーロッパからの移民にとって大きな魅力があった。ヨーロッパと異なり（現在程ではないが）19世紀としては民主主義の進んだ国であり、自由が享受できた国である。憲法で保障された「自由」（Freedom）があった。憲法修正箇条第1条で国民の「自由」を謳っている。アメリカはヨーロッパと違ってあらゆる自由があった。宗教の自由、表現の自由、集会の自由、その他

どこに住むか、何をするか等々すべてが自由であった。アメリカについて語る  
とき「自由」こそ最も重要な哲学的な思想と言えるだろう。

次に民主主義について大事な思想は「平等」(Equality)である。アメリカは  
王族、貴族というような身分制度のない平等の国である。すべての国民が身分  
の上下なく対等に生きていける民主主義国家は、ヨーロッパから見れば夢の国  
と映ったことであろう。

民主主義に必要な哲学的思想は「人権」(Individual Rights)である。(黒人奴  
隷には自由も平等も人権も与えられていなかった。しかし黒人問題は別に考える  
べきである。)人権が保障されなければ自由に、他者と対等に接することも  
できない。独立国としてのアメリカは世界で最も民主主義の進んだ国である。  
ヨーロッパでは宗教的に迫害されたり、日常の生活上、特に経済的に虐げられ  
たりしている人々がいた。そのような人々にとってアメリカは魅力的な移民先  
であった。

民主主義の国家であると同時にアメリカは「機会」(Opportunity)の国であ  
る。「機会」の国であるということは移民の動機として非常に大きかったはず  
である。そのためにアメリカン・ドリームを求めてアメリカへ移民した者もい  
た。アメリカには本人の能力を最大限に生かせる機会が与えられていた。本人  
の意欲次第で立身出世する可能性が与えられていた。そのためにヨーロッパか  
ら移民したい人々がアメリカへ入っていった。それがアメリカン・ドリームで  
ある。ヨーロッパではできなかったことを実現し、成功する夢を追い、金持ち  
になる野望を抱いて移民していったのである。

アメリカの領土が拡大し、広大な土地に住む人々を歓迎していた政府の思惑  
通り移民の数は増大した。植民地時代もまた独立以後もヨーロッパの多くの国  
から移民が続いている。しかも徐々にではあるが製造業も設立され各種の工場  
ができ、町が大きくなり、農業も鉱工業も発達し、ますます工場の労働力も必  
要になってきた。その労働力として移民が必要とされた。新しい移民にとっては  
生活を支える幸いな就職口である。

大西洋をはさんでアメリカは材木や煙草などの原材料をヨーロッパに輸出し、  
ヨーロッパは家具、布製品などの製品化したものをアメリカに輸出した。しば  
らくの間はこのような貿易が続いた。貨物船の定期便も就航し、大西洋をはさ  
んだ貿易は比較的順調に進んだ。アメリカとヨーロッパはこのような輸出入の



重要な関係が続いた。

一方で奴隷貿易が1808年に禁止されて船に積み込む荷物に変化が現れた。奴隷を船倉に積み込む代わりにヨーロッパの小作民を安い船賃でアメリカまで運ぶようになった。このような移民は荷物と異なり自分で乗り降りする楽な「荷物」なので乗組員を煩わせることもなく、船主にとっては「うまい汁」であった。このため貧しいヨーロッパの小農民はますますアメリカへ移住する傾向を強めていくことになった。

年奉奉公という制度もまたヨーロッパからの移民を促した。大西洋を渡る費用がない場合、すでにアメリカで成功している者が費用を貸し付け、借りた者は額に応じて一定期間貸し主の農場で働くという制度である。そして奉公期間が終わると分家の形で独立する制度である。この制度のお陰で貧しい小農民もアメリカへ移民することが可能であった。先行してアメリカで成功した者のニュースが祖国に届き、それを追う形でさらにヨーロッパから移民が続いたと推測される。

しかし19世紀が進むにつれて、新しくヨーロッパから移民してきても、東部には夢をかなえる土地がなかった。東部は比較的早い段階から開拓されたために、未開拓の土地はなくなっていた。新たな移民の中には東部に住んだものの不満分子が多数いた。夢と現実のギャップを目の当たりにして不満のはけ口を求めざるを得なかった。アメリカへ夢を求めて、ヨーロッパの祖国を捨てて大西洋の荒波を乗り越えて、新世界と呼ばれていたアメリカの大地に上陸しても現実は厳しかった。東部社会にはすでに夢を実現させてくれる土地はなかった。西つまり内陸部の新しい州や准州へ行くしかなかった。そのような人々にとって西部の未開の大地には危険と大変な苦労があったが、不満を解消する材料があった。

アメリカは西漸運動のために、まだそれほど大きな流れではないが、人々が西へ西へ移動することが始まっていた。東部の大西洋岸の地域はもうすでに開拓され尽くしていて、もはや誰のものでもない未開の土地を見つけるのは困難で、新しい移民が利用できる自由な土地はなかった。ヨーロッパから夢を求めてアメリカという新天地にやって来た新しい移民達は、アメリカ東部に空いた自由になる土地はないという現実を目の当たりにした。このために新たな移民

は夢を実現させるためには内陸部や、さらにはもっと西部に新天地を求めるしかなかった。

西漸運動を促したものとして1812年の第2次対英戦争も要因のひとつだった。兵役の義務から逃れるために西部へ行くという発想であった。またカリフォルニアのゴールドラッシュも西部への人の流れを促進した。1848年1月28日マーシャル（James W. Marshall）がサクラメント溪谷のサッター製材所（Sutter's Mill）付近で金を発見し、その翌年に金を見つけ一攫千金を夢見た大勢の者が現地を目指した。いわゆるゴールド・ラッシュの発端である。1849年多数の者が押しかけ、にわかに活気づいた。近くの小さな漁村のサン・フランシスコが急に人々であふれる活気有る町となった。

しかし人々を西部に向かわせたのは1851年「若者よ、西へ行け」（“Go West, Young Man”）の句であろう。これは『ニュー・ヨーク・トリビュン』（*The New York Tribune*）の社説に用いられて、その時代の掛け声となった。東部で成功できなくとも西部には未開の土地が延々と広がっており、やる気さえあれば何でもできる可能性が残されていたそのことばの影響でますます西部開拓が進行していったそしてミシシッピ河より西に次々と新しい州が形成され、「フロンティア」と呼ばれる未開の土地は段々消滅する運命にあった。

## 結論

アメリカは独立以後すべてのものが成長し続け、すべての面で発展・発達していった。領土が拡大し広大な国家となった。人口も増大し国力も成長した。この小論では領土の拡大と人口の増大についてののみ言及しているが、ほかに考察すべき面は多数ある。例えばアメリカの近代化に影響を与えた商工業、鉄道の発達、科学・工業技術の発展、等々である。アメリカはシカゴ博覧会を開催した1883年頃ヨーロッパに追いついたか、近づいたか、とされている。その後いつの間にか世界のどの国も追い越して、世界第一の国となっているのである。

## Notes

1. Robert J. Allison ed., *American Eras: The revolutionary Era, 1754-1783* (A Manly, Inc. Book, 1988), pp. 157-160.
2. Robert J. Allison ed., *American Eras: The revolutionary Era, 1783-1815* (A Manly, Inc. Book, 1987), pp. 180-183.
3. Martin Gilbert, *The Routledge Atlas of American History* (fourth edition). 池田智訳『アメリカ歴史地図』（東京：明石書店、2007）参照
4. Esmond Wright, “The Mexican War” in *An Empire for Liberty: From Washington to Lincoln* (Cambridge, MA: Blackwell, 1995), pp. 358-364. 参照
5. “pull factor” について黒岩裕著「アメリカの民族」の章に詳述されている。（矢野重喜編『新・アメリカ研究入門』成美堂、2004）